せきね文庫旧蔵『語意考 附歌集』

――研究と翻刻――

山本和明

はじめに

本学図書館に新たに収蔵された『語意考』について、本稿ではその位置付けと翻刻紹介を行なうこととした。

本書は、袋綴一冊の写本で、縦二六・四糎×横一八・二糎。表紙は枯色布目地にて、表紙左肩に「語意考附歌集」と直墨書で書名が記されている。墨付三三丁。蔵書印「せきね文庫」から、関根正直、関根俊雄氏旧蔵本であったことが分かっている。その内容は、国学者岡田真澄による識語、橘千蔭による「語意ついて」、狛諸成が寛政元年霜月に記した旨の記載がある「附言」、以下「ここの論ひは此巻の末に諸成ぬしのしるしおける也」として、幾つかの条が記されており、最後に「享和三癸亥きさらきはてのよ写しをはる」とある。本文共々、筆は一様である。架蔵の短冊により確認するに、本書見返しの識語にある岡田真澄によって享和三（一八〇三）年に書写されたものと思われる。ここまでで全二〇丁、一面十一行書。残り一三丁は、千蔭門（千蔭・縫子・自寛・春海等）の歌集で、一面一〇行書からなる。これも同じく真澄の手になると思しい。この二つは、内容的にみても関連のないことから、のちに合綴されたものと推測できる。共々「せきね文庫」蔵書印を付す。

岡田真澄は天明三年生。天保九年二月十九日没。岡田寒泉嗣子にして、通称美毛比麿、徳一郎、源蔵。隣月楼と号す。橘千蔭の学統に連なる人物であり、主な著書に文政五年刊『仮字考』二巻（勉誠社文庫89に影印有）がある。千蔭門ということから想像するに、

本書「語意考附歌集」は、或いは千蔭周辺から、真澄が借覧し写したものかとも考えられる。

以下、限られた紙面の都合上、「語意考」を中心に考察を行い、「千蔭門歌集」（仮題）に関しては後考に委ねたい。

諸成「語意考」検証

狛諸成は享保七年生。狛近方の男にして通称岩之丞、帯刀、致仕号助教。『寛政重修諸家譜』第二二記事では、諸成のときに野田に姓を改むるという。寛保三年田安家近習番となり、のち用人に転じた。享和二年没。その学芸上の業績等に関しては、高本千鷹「狛諸成翁につきて」（『藝文』第三年第九号　京都文学会　大正元年九月）や鈴木南陵「狛諸成翁」・三村清三郎「国学者伝記研究資料　十九狛諸成墓」（『国学者研究』北海出版社　昭和十八年一月）、河野頼人『万葉研究・近世』（桜楓社　昭和四四年一月）に詳しい。また、三村論文に従うならば、昭和十八年以前の京都大学の雑誌に、宮内省令人の長である上真行氏によって諸成の詳伝が書かれている由だが、残念ながら確認しえていない。

さて、本書の「語意考」該当箇所に関して、すでに先学による紹介がなされている。旧蔵者に関わる『関根文庫目録　六』に記されたその内容を以下、摘出する。

・語意考（狛諸成）　一八〇三写本

付歌集（加藤千蔭門）　右と合冊写本

国語学大系第一巻に前掲（山本注―語意考　一七六九序版本）語意考を収め、解題に、異本乃至改定本として、諸成の語意考を二種あげているが、其の二種のうちの第二種（山本注―本稿乙本を示す）は、上下二巻に分れ上巻を「語意考附録」と標題している由。本書はそれの別本ともいうべきものである。その「語意考附録」は千蔭の序と「附言」と「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ　散位狛諸成」の一文との、三種で成る由であるが、本書は、三種のほかにも諸成の立言は更に多く、今で言えば「語意考所感」とでも名づくべく、真淵の語意考とは別著と考えてよさそうである。

〔傍線、山本による〕

確かに一瞥するに、真淵『語意考』とは別著の体裁と内容が窺える。しかし、関根俊雄氏の云う「三種のほかにも諸成の立言は更に

多く」存在するのか否かは、国語学大系の解説に触れる「諸成の語意考」二種との比較検討を待たねばならないこと、言うまでもなかろう。

『国語学大系』第一巻「語意考」解題に示された諸成「語意考」は、指摘の如く無窮会神習文庫に今日も二種存在する。先の解説の意味するところを理解する上からも、神習文庫本の概要を、『国語学大系』解題・『賀茂真淵全集』解題を参首しつつ、管見に及んだ中で気付いたことなども踏まえて、次のように纏めてみることにした。

(1)語意　　写一冊（無窮会神習文庫　請求番号一―一二〇四七―井）　　※以下、「甲本」とする。

巻首一丁に「語意ついで」と題する加藤（橘）千蔭の序があり、次に「附言」として、狛少兄諸成による真淵『語意考』の批評と弁護を八条にわたって説いている。全六丁、頭註がある。附言末尾に「寛政はしめのとし霜月」との年次明記。以下、二二丁にわたって真淵『語意考』の本文（清書本系統）があり、別本による校異の書入が記されてもいる。巻末一丁に真淵の明和六年二月付の序が、跋文として挙げられている。頭註は刊本にあって、これにないものがあり、また刊本の頭註に諸成案を加えたものもある。一部後人の手になる注も存在するようである。国語学大系解題執筆者により、諸成の改訂が相当にあって真淵の稿本とは多少面目を異にしたところがある、とも指摘されている。

(2)語意考附録／語意考　　写二冊（無窮会神習文庫　請求番号二―一二〇五〇―井）　　※以下、「乙本」とする。

国語学大系解題執筆者は「語意考附録とあるを上巻とし、語意考とあるを下巻と見る」べきとし、「語意考附録としたのは、後に誤って附した題簽」であるとする。恐らくその内容をみての見解であろう。先述『関根文庫目録　六』も、この前提に立っての解説となっている。確認した「語意考附録」には、橘千蔭の序が一丁。八条からなる附言ならびに頭註が、七丁にわたって記されている。末尾には「寛政はしめのとし霜月　狛少兄諸成かいふ」との明記がなされている。次いで、甲本にはないが、「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」として、「散位狛諸成」の一文（一丁半）が添えてある。以下、真淵の「語意（考）」が続き、下巻とされる「語意考」に引き続く。両書を併せて大体甲本に一致する内容をもつ。国語学大系解題執筆者は、頭註も整備されており、狛諸成改定本である甲本の、後案と見るべき、との見解を示しておられる。この乙本は甲本の清書本と考

えられる。

ところで、この「語意考」という題名だが、「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」における諸成の発言を踏まえるなら、若干の注意を要しよう。

さて語意は此五十連語の用ざまを。もはらいひわかちて。言の解る事は。いさゝかまじへたるのみなれば。古刀婆能古々呂と唱ふべし。言の本。言のよし。言のたふとさをくはしくあげて。言意ちふ書をおのれあらはしぬ。よて語意といひしを。こたびあらためて。古刀婆能古々呂となしつるをこゝにことわりぬ。

即ち諸成の記した『言意』とのまぎらわしさから、「語意」とせず「古刀婆能古々呂」と変更するというのである。『言意』については鈴木論文等に触れるため省略するが、この見解を踏まえるならば、本書題名も、後人に依ると目される「語意考」ではなく、「古刀婆能古々呂考」でなければならない。

以上のように纏めてみた。『賀茂真淵全集』解説によれば、他にも丙本として位置付けられるものが、西尾市立図書館岩瀬文庫に所蔵されている。同様に纏めておく。

(3)語意附言諸成著　　写一冊（西尾市立図書館岩瀬文庫　請求番号一二七―一九）　　※以下、「丙」本とする。

墨付二六丁。題簽は右の通りであるが、かすかに藍墨にて「加茂真淵著」とあるように思える。その内容だが、冒頭から二一丁裏までは真淵「語意（考）」関連（閲覧時、十分に確認しえなかったが、全集解説によれば浚明本『語意』抄録らしい文章と別本系『語意』とする）である。二一丁裏に「右以義文蔵書書写畢　文化七午年九月伴直方」とあり、直方校写本らしい。続いて二二丁表には、真淵家集から抄出した「語意跋」、二三丁裏には「源をクヱン　貴をクヒの類　一條とすべし」などと記された注記がある。直方に依れば「山岡明阿か書加へたるものなるへし」とのこと。そして二三丁表以降、「語意附言　狛諸成」とあって、八条からなる短文が記されている。甲本乙本に比してその文は短いものである。参考までに、二六丁裏にある識語を引用する。

こは諸成かみつから書て草稿のまゝなれは文字のたかひなとさはにありてよみえかたきところ〳〵多かりされとそのまゝ

写しおきぬいとまあらはかうかへたゝさんものを

文化十二亥とし文月九日　　伴直方

八条の本文も本学蔵本（翻刻本）や無窮会甲乙本と異なりをみせるものであるが、なにぶん短文からなるものであり、その文章量、また直方の「草稿」という言葉などから考え検討するに、甲乙本に先んじる草稿との位置付けができよう。

この他にも、高本論文に引用される「語意」の頭註部分は、甲乙丙本いずれにもないものであり、今日確認しえない『語意考』も存在したようである。

さて、翻って本学貴重資料室所蔵『語意考』は果たしてこの三種の本との比較検討の結果、どう位置付けられるのであろうか。

『関根文庫目録』では「本書は、三種（山本注―千蔭序・「附言」・「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」）のほかにも諸成の立言は更に多く、今で言えば「語意考所感」とでも名づくべく、真淵の語意考とは別著と考えてよさそうである」との見解が示されていた。しかし、乙本にある「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」は残念ながら本書に掲出されていない。また、一見立言が多くみえるところは、甲乙本との比較調査によって、甲乙本に多出する頭註箇所などの文面にほぼ同文であることが判明した（丙本とは一項目の内容量から考えて、異なるものであることは明らかである）。その観点でみれば、本学所蔵『語意考』本文中に「こゝの論ひは此巻の末に諸成ぬしのしるしおける也」「ひとつと云所の頭書」「二つのかしら」といった注記的文言が散見されることに気付く。「ひとつ」とは賀茂真淵『語意考』中の見出し語であり、要するに、元になった書を全て写すのではなく（真淵『語意考』本文が欠落している）、千蔭の序、諸成の「附言」はともかくも、真淵『語意考』の頭註箇所に記されていた諸成の見解のみを抄写しようとした岡田真澄の書写姿勢が本書から確認されるのである。「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」がなく、また音楽を扱った項目の文章をみるに、その翻刻本文は甲本に近いものがある。とは云えかなり整理されている点からみて、本書は甲本寄りながら、甲乙両本の中間的位置付けが可能かと思われる。

以上、本学所蔵本の位置付けを考えてみた。

江戸県門と諸成

ところで、既に寛政元年に『語意考』は刊行済みであるのに、なぜ諸成はこうしたものを作成したのであろうか。とりわけ千蔭に序文作成を依頼していることを考えるならば、出版を目指してのものと思われる。この点について高本論文に「諸成の修補本　語意は真淵翁の語意考を修補改題したるもの。橘千蔭の序を付し、自らの附記を加へて出版すべく、その版下本あり（別に草稿の本もあり）」との発言があることは注目に値する。広島市小川氏所蔵という諸成遺書は、残念ながら不明と云わざるを得ないが、諸成が意図したのは、真淵『語意考』プラス自身による附言からなるものを出版計画していたわけで、今日確認できる甲乙本ともに、そうした形式を備えているのである。

こうした書の出版を考える上で、直接的な資料ではないが、一つの示唆に富む書簡を呈示したい。すでに拙稿「千蔭関連資料一・二」（研究論集四一）で翻刻をしているが、改めて掲げることにする。

一　大阪にて「古意」刊行之由承及候に付。此方刊行之故障に可相成。ことに先師の遺書を刻し申候に。千蔭小子など存在いたし居候時節に。他人之未熟なる校本を世に行ひ申候事。傍観仕にくき事に御座候へば。大坂表の刊行相止め申候様に。小子より申遣し申候。然る處。波野村某が許より。貴家の御門人小林氏の家来を以て。貴君へ御願申上候由。其段千蔭まで逐一被仰遣。御趣意之通承知仕候に付。其趣を以て又候私方より大坂へ申遣し申候ば。すでに刻成かゝり板今更相止め申候も。書肆の難義に相成候事に可有之候へば。大坂表の刊行其通りにて発行可致。且又此方にても別段に刊行致し可申候まゝ。夫を大坂より故障いたし候義は不相成事に候まゝ。其趣相心得申候様にと。上田餘斎方まで申遣申候。是は貴君千蔭方へ被仰遣候御書面の趣意を受申候て申遣候事に御座候。然る處。餘斎方より私方へ申越し候は。大坂表にて刊行いたし候事。ゆるし申候段は辱存候。さて又江戸表にて同書板行の事。大坂にて故障申まじき段。其通り書林へ申聞候所。大坂の書林申候は。文雅の上の事は兎も角も。板行発行の義は商売の上の事に候へば。江戸表の類板は相成り不申事故。此方より故障申候事に御座候。是は貴君の思召とも相違いたし候事。且又右體の次第にては。此方にて此上校考の本を刊行は不相成候すがたに成行候ては。私校考の本のみには不限。不相済事に御座候。仍て岡部氏より大坂表刊行相止めの事被申付。其上大坂の書肆刊行を相とめられ候事を迷惑に存じ。又候相

願ひ申候はゞ。其節始之かけ合之通り。大坂江戸両板ならべ行ひ候様にも可相成歟と存。千蔭を以て岡部氏へ其段被仰通被下候様。貴君迄申上候事に御座候。此分にいたし置申候ては。故縣主の著述の書を。大坂人の。刊行は心まゝにいたし。其ために故障いだされ江戸にて以後刊行不相成候と申事は。主客相違の事に被存候。然る処。此義を何か私不埒なるかけ合等も仕候様被仰立。何とも迷惑仕候。如何の思召にや。委細御趣意之所承知仕度候。

寛政五年三月十九日付、狛諸成宛村田春海書簡である。賀茂真淵の『伊勢物語古意』は、寛政五年九月に、上田秋成が整え出版された。その刊行にあたり、江戸県門周辺でも出版計画が進んでおり、「大坂表の刊行相止め申候様に」との抗議がなされていたようである。結局、双方とも刊行するように当事者間では和解がなされたものの、板行上の類板にあたり再び問題となった。

あるいは、今回も同様のことが想定できないだろうか。『語意考』「附言」では、諸成が「寛政はじめのとし霜月」に記した旨、記されていたわけだが、『伊勢物語古意』の問題が生じたのは寛政五年。それまでは実際に、類版の問題について諸成はあまり知らなかったことになるのである。寛政元年夏、本居宣長の手によって『語意考』は刊行されたが、それに対する不満が江戸県門周辺にあったことは、想像にかたくない。「寛政はじめのとし霜月　狛少兄諸成が云」という言葉は、文字通り刊本『語意考』を契機としての執筆を物語ってくれよう。「附言」は、狛諸成が中心となって宣長『語意考』改定本を作成しようとした、その改定に関わる文字通りの附記であったかと思われる。

甲乙本から窺う限りにおいて、頭注などにかなり諸成色が前面にでており、そのために大幅な増となっている。しかし出版にあたっての類版の問題があり、刊行されなかったものではないだろうか。真淵継承をめぐる他派とのせめぎ合いの様相をみる思いがしてならないが、ことはそれだけにとどまらない。

例えば次のような本書中の諸成発言に対し、問題は生じなかっただろうか。

大人の書し『語意』に「阿伊宇恵袁は、同行と和行にはいさゝか通はし云言あれど、加行より下の八行に通へる事なし」とかゝれぬ。さるを、おのれこたびあらためしは、大人のをしへのねもごろなる故、かく考る言どもの外にすでに云如く、『荒良言』てふふみ書て、ふかく言のよしをおもひ明らむる事あれば也。

真淵の見解を改めたという諸成の発言からも、実際には春海たち江戸派の人々が不満に思ったことは事実のようである。再び春海書簡から例にあげる。とりわけ傍線箇所に注意いただきたい。

一　故縣主の学を御よろこび被成候て。『万葉考』などをも続考二十巻まで御終業被成候段。誠以御執心之御事。不堪感慨奉存事に御座候。此義は縣主地下にてもさぞ悦ひ申さるべき事と乍憚奉存候。且又千蔭を始め同門の者ども皆御厚志をよろこび居候事に御座候。乍去右の書中故縣主の学問の趣意とは思召行違申候様なる所も多く有之候。此義は千蔭・黒主なども毎度左様に申居候事に御座候へども。御老学の事。ことに縣主御門人と申にても無之候まゝ憚多存候て。誰も其子細申上候者も無之候。乍然学問の道と申候者は私の物にては無之。天下後世へもつたへ申候ものに御座候。一箇の我慢気侭を立申候とも公ならぬ事は益なき事に御座候。況や縣主の学問の趣意を御続き被成候思召にて。縣主の意と相違いたし候ては甚だなげかはしき事に御座候。仍て不顧愚拙鄙意の程申上候。

一　躰貴君御学問之様子を窺ひ申候に。殊之外五十音にのみ御泥み被成候て。古書（山本注―真淵の著書のこと）の例に御かまひ無之。臆説をのみたくましう被成候処。縣主の意とは甚行違候事と被存候。御見識にて一家を立られ候事に御座候はゞ。他より評論を加へ申候筋は無之候へども。縣主の心を御続き被成候思召に御座候へば。御主意の違ひ申候処存ながら黙止いたし申べき理無之候事に御座候。此所御賢慮を被廻候様に仕度候。乃近来著述仕候『五十音弁誤』と申もの一冊呈貴覧申候。御熟読の上思召も有之候はゞ承知仕度候。縣主の主意を以て押し申候に。右の『万葉続考』の中に古書と相違の筋多く相見え申候。又『荒良言』などは全臆説のみにて。古書とは合ひ不申候。若愚蒙の慮見をも御聞被成度候は。其誤謬の所一々古書の証拠を挙げ申候て論弁いたし入貴覧可申候。且又「コト」と「コトバ」と別段の様に思召。縣主の『語意』をも其趣意を以て御改被成候事。甚甘心不仕候事どもに御座候。「コト」と「コトバ」と分別ある事。何書に証拠有之候事にや心得がたく候。古書の上に左様の筋は絶て無之候。是等は疑もなく臆説杜撰と申ものに御座候。乍憚御賢慮を被廻候様に仕度候。古人も申候通先入のもの主となるならひにて。自分の思ひ入候事は人の評論に従ひがたきものに御座候へば。申上候も益なき事とは存候へども。私事当時にては此学を専門の業に仕居。ことに師恩の万一をも報じ申を終身の業と心懸け居申候へば。是等のこと強て申上候も且は先師への恩と

奉存候事に御座候。此書状の上に付申候ては御忿怒にふれ候をも不憚十分に直言申上候事に御座候。人の心をかね申候て我申べき事も申かね候事は婦女子の上のことにて大丈夫之慚申候事に御座候。乱筆失敬の段は学問の上の議論に候へば其罪をゆるされ候様奉仰候。恐懼々々

ことは他派との関係のみならず、江戸派周辺の「混乱」、即ち真淵後継をめぐる鬩ぎ合いをも示していたのであった。諸成と千蔭との微妙な関係については、河野頼人が、寛政五年頃までに了える『万葉考』増訂に、千蔭や黒生が積極的に助力していないことを示してくれているが、書簡にみる春海の攻撃ほどではないにせよ、本書千蔭序文にもそうした微妙な関係が反映しているように思われるのである。

諸成の手を経た『語意考』はこれまで真淵研究において校合本文としてとりあげられることはあっても、諸成自身の手になる「附言」などはあまり顧みられることはなかった。しかし、こうした諸成の「臆説」が巻きおこした影響なども、とりわけ江戸派周辺には存在したであろうし、今回の資料紹介が諸成側が如何なる見解を提出していたかを示すのみならず、そうした問題を考えるきっかけとなればと願ってやまない。

【翻刻】

凡例

・《　》内は頭注箇所を示す。

・〈　〉は割書を示す。

・『語意考』については甲乙本を参考にして、任意に句点、中点、括弧（『　』「　」）を付した。

・『語意考』について、甲乙本との比較により、任意に改行を施した箇所がある。甲乙本には内容の峻別を明確にするため「○」が各冒頭に付されているが、本書でも翻刻に際し新たに付した。

・「千蔭門歌集（仮題）」では、歌を二段下げに統一した。

・翻刻本文作成者の注記は【　】で括った。

・調査の許可をいただいた各図書館、ならびに翻刻をお許し頂いた本学図書館に深謝申し上げる。

『語意考附歌集』

このふみは。やつかれ。かたはなる手してかひうつすなれは。よむひとのこゝろをやりてよみたまひね。かしこ。　　真澄

【諸成「語意考」】

語意（コトノコヽロ）ついて　　天巻

あがかものうしのいへらく。上つ代の一言は下つ代の百（モヽ）千にわかれり。下つ代のもゝちをとかんには。上つ代の一言をなも明らめよと。うべ成かも。其一言はやがて言霊（タマ）のさきはひませる一言にして。かしこしともかしこきはみ也けり。うしさきにことのこゝろをとふふみかきおけれど。猶またからずなも有を。狛少兄（コマノスクネ）は。うしに名つきおくれるたくひにはあらで。わかなへの若かりし時ゆ。

開花のみさかりなる比。かしこきみまへにして。日にけにうしとあけつろひ。とひ明らめたるがへに。菅の根のねもころにつとめ。あさちばらつはらにかゝなへて。望月のまたけくみちたらはせるなせり。いてや其一言は言霊のさちにして。少兄のこをまくせしは。あがうしのさちならずや。おのれ千蔭おちなかれど。うしの門つ人のつらなれは。此ふみのはしに其ことわりついてよとなも。少兄のきこせるまに〳〵しるせるのみ。

田道婆名の達可雅翁

附言

○他の国は皆音(コヱ)もていへば。五十聯音(イツツラノコヱ)といへり。吾朝庭(ワカミカド)なるは。阿の言やかて言也。しかれは吾国にては。五十聯音とは唱ふべからず。五十連の言といふべし。こを真渕しらさるにあらねと。いひもてこしならはしにひかれて。五十連のこゑとはかける。こたびあらためて音とありしを皆言となしぬ。ことわりは次々にもいふ。真渕が文に合てもしるべし。すへてかゝることをことわるは。此言(コトノ)意世(コヽロ)にもてあそへれは。あらためしをしらするのみ。

《此言と改むるのみならず。転し通ふ等かずかずの條に。已に世にもてあそへる『語意』とたかへる有は。源清良・橘千蔭・尾張の黒生・おのれ諸成ら。論ひて改しことあり。真渕かあやまりあらせしとて。おのか友からあやまてるにやあらん。よくかうかへなば。うべなはまくもあらん》

○此五十連言(イツツラノコト)を。「阿伊宇恵於」也といへるものあれと。おのれ此言のよしをまなばひはしめしをりに。真渕自五(ミツカラ)十連言を書つらねて。こは山背稲荷祝部(シロノハフリベ)が家に。いさゝげばかり伝言のあなりとて見せしは。「阿伊宇恵乎」とせり。さるを揖取魚彦が「阿伊宇衣乎」とせしは。或人のいへりしをよしと思へる也。いつこの人のいつらなりといふも。其よしを考得しによれるにしあれば。そはそがまゝならめ。おのれは真渕が伝へによりて。吾朝庭の言を解こゝろむるに。「阿伊宇恵乎」によらされば。言を解へかるよしなかるましに。古へをたどるに。吾国には見ることなし。日放国(サカル)・日入国の例を見るに。皆しか也と考るよしあれば。『語意』の五十連言

四七

の言なみせり。よしはこゝに直しかたかれは。『音の意』てふ物にいふ。

○此ふみやすらにかろらに見すべからず。古言に入たらぬ人はうまし物ともしるべからず。よく入立て此ふみをわいだめえは。言のもとをおしかゝなへて。うまくあぢはひ。くちにも心にも思ひかね得なん。言の意のおくかをとめ。言の延(ノヘ)。約(ツヾメ)。畧(ハブ)くも。転(ウロヒス)も。回(メクラ)すも。おの意のまゝなること。山だちのいかならん荒山中を行ともたどらず。あま人らが荒海のそひの極(キハミ)いたらぬ事なきが如ならし。さて此真渕は。おのれかつかさの下につきてつかふまつれる人なれば。やつがれを門べにあそべるつらともなさす。おのれも師(ミナモヒト)ともたふとまさりしに。かきのこせる書等年月よみかうかへ侍りて。真渕の此言のはえしに生る。山菅の根もころ〳〵成に。めづることとさはなれば。花もみぢ過行にし跡の今にしては。師とあかみ思ふ心もはらなり。そをよくも見わかぬ人の。おのれ〳〵が心ならひに。こは真渕誤也。かれは縣居がひが言也など云人の有そいぶかしかれ。濱のまさご数々の事にしもあれば。一ッ二ッの誤。三ら四ッらの考のいたらはぬ事なからんや。そを見はえしなん事をゑり出て。たふとみあがみて此大人(ウシ)をふりさけ見れば。天の益人なる事。あきらけき人なるをや。さればよ今にしては。真渕解はじめし古言の文ら世にもてあそび。しづけかる御代のさちはひに天の益人等なり出て。言玉のさちはふ国風(フリ)の古へをしのぶも。此大人のいそし(功)ならで何そもや。

○此『語意』の義(コトワリ)もて。東万呂・真渕の解はじめし言。百五十言(モヽマリイツコト)。おのれがともがら解得し言千(チヽ)にあまれり。

○真渕此ふみに。『古事記』の神の名に。上聲(アカル)・平聲(タヒラカル)・去聲を添て。音をしらせしをあげ。吾国の言の上聲・平聲なるも。物と物とを合せいへば。去聲にいふ言有をあげつろへるを。あるものいへらく。吾国に四聲あるにやと。いともなじりてのれり。こはほしいまゝにおのれがそらことわりをいひつのれるにて。誠しくはしらぬ事をかへり見ぬうこ人也。吾朝庭に四の聲有のみかは。古楽の十二律・俗楽の八十四調(セイ)皆とゝのへり。何そといはゝ。楽に合せて哥をうたひ。あるは楽の音をまねぶもの。此聲・此調を聞わかで。其わさをなし得んや。聞わきて口より出る音(コヱ)・楽のしらべにあへばこそ。其わざ〳〵をなしうるにあらすや。神楽哥・張(サイハリ)・風(フリ)俗のう

たひ物。皆唐の楽にあひ。高麗・林邑・鞨・諸蕃の楽にもあへり。それ〳〵の附物・鄙曲・発聲（ホツコン）・管（フエキノ）に合ざる物なし。その哥の聲の。他国の楽の音に合よしをあらゝにもこゝにいはゞ。それ楽てふ物は。宮・商・角・徴・羽の〈是唇舌牙歯喉の音也。さるを吾国此音なしといへるひともあり〉。十二律に配当して。黄鐘の宮調を正宮調と云。此正宮調の五分の一を減して。宮に位すれば。黄鐘の商調となる。律ことにかくして。変宮変徴を律ごとに加ふれは。律皆七調となる。七調十二律に位したるを。則俗楽八十四調といふ也。此八十四調をもて。其律のめぐりを考へ合せて。律を定む。さてこそ楽の音はなれる物也。かくくはしき音律に合て。それ〳〵の楽調なれり。其楽に合せて哥をまねび。楽音をまねぶに。道引ものゝ音たがひては。まねぶもの其音を聞わかんや。それ八十四調とゝのはざれば。管（フエキノ）と聲とあはず。哥をうたふ聲と同しく。管の聲のあふは。其聲の正しきをしる証ならずや。されはかくいひもて行ば。またく吾国の聲。唐の音の平上去にことならずと云が如くなれどしからず。是吾国のならはしの音の正しく。平聲・上聲・去聲もていひかなふるをあかずのみにて。唐字の音の事にはあらず。しかはいへど。吾国の聲楽にあふをおもへば。漢・唐の正音と。吾国の字音の唐より伝へしは。音も同しかりしにや。今は他の国も七百年ばかりは。狄（エミシ）の音聲まじはりて。漢・唐の正音のまゝならじと思へる事は。おのれ既『音のこゝろ』てふ物にくはしくいへり。吾朝庭にても畿内（ウチツ）国の人は。上つ代より吾国の音正し。西東のはて成国人は音は皆訛り。されど言たがはされば。おのがどち聞わきまへたれるは。言玉のさちはふ国の手風にして。音などのかつらかなる事にはかゝはらず。是ぞいはまくもかしこき。皇御祖（スメオヤ）の大神ゆ生（アレ）つぎませる明つ御神の。み威稜（イツ）たふとく。千五百代の御末までも。都遷（ウツシ）ちかき国は。音正しかる神徳（イキホヒ）をたふとまさらめや。かしこまざらめや。

【甲乙本割注扱】さて吾国風の聲の事。真渕始ていひしにあらず。難波の契沖法師も既に論ひしこと也。四聲といへば字音の事のみ思ひなせるは。唐まなびの人の意也。いつこの国か音にわかちあらざらん。其音正しからぬを。よこなまりとはいふなりけり。

○古への言の仮字にて書しをわきかねて。唐字を傍注（カタハラヲシヘル）てやふやく国の言の意をしるそうこなれ。言は吾国の言にしもあれば。おのか口つから常いふまちかきことなるをわすれ。遠き他の国の字もてしらんてふことや有。かへす〳〵も真渕が此文に解し。延と約と回

と通はすと畧とをしるへし。猶もいわゝ譬喩言有。是等のことをおしきはめ。唐字による事をすてゝ。言もて言は解へかりける。『古事記』『日本紀』はじめて。吾国の古書は言の元をきはめて解ならで。まことしくふりぬる世の有さまをしらんや。唐国の義をいひ添へて解は。いかて皇大御神の神心ならんや。おのれ其書らの意を解得にし言らあれと。千が一にもたらはされば。玉ちはふ神代の書はかけまくもかしこくて。解かれさりけり。しかあれと唐の義を添へいふなるはうこ也としるのみ。

○或人いへらく。延・約・転し・畧くちふ。くさ〳〵の事古へに有といへと。そもまことしからぬに。唐言をまじへ云にも。それらの事有といふ。いや心得がたかる事にこそあなれと。おのれ答。いましは古へをしらぬのみかは。今わらはへの言にも。其よしあるを聞しらぬがへに。いましが口づから常言ことばをさへ。わきまへしらで。古へをしふるこそうこなれ。それわらはべに。「ありや」と問へは。「あひァ」とことふ。此らは「留波」の約にて「あるは」と答ふる也。あるひはうちへ国の人。「それはしらぬ」ちふ事を。東のわらはゝ「そらしらぬ」と云。是も「礼波」の約「良」なれはしか云を。其「良」を延て「そりやしらぬ」といふも再延る也。又東の人のいやつこらに物令(キヲ)するに。「かくしろ・しかせろ」てふは。やかて約也。其言の元は「かくしられよ・しかせられよ」也。さて「良礼」の約「礼」なるを。其「礼」と「与」を約れは。「呂」となれば。「しろ・せろ」とはいふ也。されと是を東の方言とのみ思ふべからず。御神楽の人長(ヲサ)が云。人物音の才(カト)こゝろむるに。「聲をとゝのへ呂奈引・物音とゝのへろ奈引」といへは古くよりの言也。こと〳〵くしか也。なほもいはゝ。東の人の「これだ・あれだ」と物に添へ云を。都人は「是じや・あれじや」と云は。東の「陀」は。「それである・これである」也。「泥阿留」てふ三言を約れば。「陀」となれば也。都人は其「陀」を「奈」に通し。「奈」を「邪」に転して延ふれば「自也」となれば。「それじや・是じや」とは云也。

【甲乙本割注扱】春の雨の。「能安」の約なるを。左に通はし。春雨なと云。

「陀奈邪」の通ふ例は。真渕「通ふ言」の條(キザ)に委しくせり。夫おのれ久がたの天津神言をあがみて。古今を合せ考ものらに云に。雨もよ。くもり空なす。そら言いはんや。汝はしらぬ義をうたかひ。父母の神ならはしなる。言玉のさちはひをなみする人也。こを天つ神の聞こしをさば。上つえだ下つえだのおよびのつめ剥てはらへつ物となさしぬ。神やらひにやらひたまふべかる。つみ人にこそ

あなれ。

○真渕はあかねさす日のあかき心もて。吾国風をあがみたふとみ思ふ。ひとへ心のうらなきかまに〳〵。いひ出たる言には。片糸のかたよりによりたる如。聞ゆるもあるを。他の国風まねび。かの国を中華（ナカツクニ）とだにあかまへ。吾国を夷なりとまて賤しみ思ふ人の目には。物くるほしとも見なん。そはさてもありなめど。下にもいふごとくおのがどち思ふ事有て。こたび改て皆すてつ。さて真渕がしかいひしよしをいかにといはゞ。夫物の始を云人は。他のひきゝをあげいひて。おのれが高きをしめさへる。わざにとりていひし也けり。さるを他の国風をあしとするが。真渕が意也とおもひまねぶは。此すちのくり給へし。糸筋をみだらずになもあれ。うつゆふのまゆごもり。ひさゝに思ひかねて。此言の糸口をしも見出にたれど。乱たる世々を経て。解も直しがたかる事さはなるを。やうやくにいそしつみつゝ解始つるが。百たらず七十の年（ヨハヒ）のきはみ。解もはてずて行川の。過にし跡の今にしては。のこせるふみもて其糸口を止（ト）め。言の糸筋解あきらめ。言の和幣織はえなんこそ真渕真こゝろにはあなれ。かの他あしてふ人を物にたとへば。葦辺（アシベ）にむるゝ小鴨（ヲ）のもころなし。あそばひをるわらはべらが。およつけなんとほりおもふ物から。おのがどち丈（タケ）くらべなし。高かるをまされりとよろこぼべるにあえたり。年行丈のかぎりのばへ。高かりと思ひえては。くらべぐるしくせしも。たわするゝ如。おのれしも高からば他の高きもうらやまず。他の低（ヒキ）もいやしまじ。さる心ならはしにもかもと思へれば。人のたふときはたふとしとして。おのれは皇御国のたふときを明らめなもと。ぬはたまのよるはしみらに。あからひく昼はすがらに。ことだまの緒の千筋の糸。解あがちなん事をひたぶるになすも。おい行おのがひが心にしやあらなむ。あなかしこ。

寛政はしめの年霜月　　狛少兄諸成（コマノスクネ）か云

【真澄注記】こゝの論ひは此巻の末に諸成ぬしのしるしおける也。

【以下、甲乙本では諸成「附言」頭註事項（一部異同あり）】

○おのれ諸成がよるは安然の『悉曇蔵』。覚源の『三密抄』也。さて後漢の服虔が切反の説。魏の李登が聲韻の説。六朝の梁の沈約が説。皆均し。唐にももと四聲のさたはなかりしに。諸蕃の来るものゝ世々にまされば。聲の乱む事をおそれて。反切の説はたてし也けり。そは悉曇に習しなるに其五十聯音。荷田祝部が家に伝へしに合へば。皇朝の言も正しきをしる証ならずや。しかして言を解に義かなへば。いやちこなるより所ならすや。さて日放国は日入国に習て聲をたゞしぬ。しかるに我国にては。天地ひらけ始しゆ。此言有て。此五十連の言もて。いひたらはしぬ。さらば真渕のいへる如。天地のおのつからなる五十連言なるをおもへ。よておのれはまどふ事なく思ひ定し也。

○言といひ音と云も。皆人の口より出るを。其国土にていひわくなれば。もとは必しもたがはし。もと天地のならはしなれば也。其天地にたがひてわたくし言をしもいひつるは。もとにかなふべくもあらぬことわりならずや。

○言の延・約・畧・転すなど云事。古くより此目（ナ）の有にあらず。千五百（チイホ）とせが程。我国風をわすれ。千万の言もふみも。字の音をまじへていひもし。書もなれわきまへつ。わが国の言葉をしる今となりて。古へを道びかんとするなる。かりそめのたつきに。此名をまうけて言のみ。延・約てふ。通すてふも。皆自らに聞わくるそ。古へのさちはふ国にはあなる。今も其よしの有事は。下の文にいへり。

○真渕古へにいそし有をいはゞ。『古事記』『日本紀』の訓をあらため。『紀』の哥をことわり。『万葉集』を考へ。日本紀竟宴の哥を注し。或の『祝詞考』を撰し。冠辞を考。此『語意』『国意』『哥意』『書意』を書。『古今集』の序を解し。同哥を論ひ。『伊勢物語古意』をあらはし。『うひまなび』を改解り。かゝる類はさら也。『源氏物語新注』『浄土三部経言解』『風俗哥の考』・『金槐集』の哥のよしあしをいへる。かゝるかりそめなる事かそへもつくさじ。くさ〳〵の考の中に。『神楽哥の考』は。源清良に伝へおきしを。清良おのれ諸成にあたへし也。つら〳〵見るに。こはいともひでたる考なれは。ひめおきぬ考なれは。世にひろめなんとねき思へれと。宮風の秘事。広くもらさんはかしこかれは。ひめ置ぬ。考のねもごろなる事。よく古へに入たゝずば真渕が意を得じ。

○言の解は。『古事記』『日本紀』『万葉集』に。下りては『続紀』『新撰字鏡』『和名抄』の訓により。仮字により。小注に依て言のもとをしるし。かりそめに書あつめて。『荒良言（アララ）』と名づけぬ。

○此聲の事をいへば字音をまじへいへり。
○音をたふとみ云時は。たひらけきをたふとしす。かれはじめにおとなるを。平言といひ。のほりあがる聲とものぼる聲ともいひ。通いぬるをさる聲と云。四つの聲つきぬるをいる聲と云は。他国と同しことわりなる事もとより也。されと三十二韻なと云。こまやけき事なきは言の国なれば也。さて道引人も道引るゝ人も。此聲此律をしりて伝ふるにあらず。いひかなへて伝へ。聞得て伝はりて。四聲律に合ふは妙ならずや。
○我国の古へ音に細しき人有て。他の国より伝へし楽に習て。楽を作し人あまたあり。今用ひらるゝ楽。我国にて作しあるは。楽書を見てしるべし。
○我国の平聲・上聲・去聲を。今常に云言にて分ちいはゞ。「瘡」は平聲也。「加沙」の「加」は「加由」の約「久(ク)」なるを。「加」に通して。「加」といひ。「沙」は「志伎奈」の三言を約し也。「志伎」は「頻」也。「奈」はいひ入るゝ云にて「痒頻(カユシキク)」也。こは東の人も平聲にいふ。
「蓋」は上聲也。「加射」の「加」は「久波」の約。「射」は「曽波」の約にて。「加添」也。さてこは合子の蓋也。此「蓋」を「衣蓋(キヌカサ)」にあつる時は去聲。是も西東にても上聲に云。
「笠」は去聲也。「可沙」の「加」は「可志良」の三言の約。「沙」は「曽波」の約にて頭に添也。此「笠」を東の人の上聲に云は訛也。さて此「笠」を「加夫留」と云はかしらにふるゝ也。則冠を体言にいへば「加牟利」也。用言にいへは「加夫留」と云。是等をもて言の延・約・平・去を知れ。体・用の事は。真渕此書にくはしくせり。此平・上・去をいひかなふるは。都人也。さらばいはまくもかしこき今の天皇の神徳ならすや。さてしかる故有て。是ぞ平聲。是ぞ上聲と云ことわざの有ならで。しかるが国のならはしの聲也。唐の字音もさこそあるらめ。さて此條は本文二ッてふ條を猶あかさん為に云。
○唐字を傍注して。やうやく国言の心をしるかをこ也と云は。『神代紀』に。「顕神加(カン)之憑(カヽリ)託」。是を注に。此云「歌牟我(カンカ)可利(カリ)」と注せしに。『仲哀紀』には「帰言神教覚語」。又『紀』に「神託里后誨」とあり。是を『古事記』には「神懸」とかけり。此「哥牟可、利」てふ言を解得て後に。『紀』を撰れし時までは。古言の意を得て字を宛るは。義もてのみかゝれしを知る。上つ代は古言にくは

しけれは也。さて唐の学のみに成て。古言忘れはてたる今となりては。東万呂五十年。契沖五十年。真渕五十年。おのれ二十五(ハタチマリイツ、)の比ゆ学始て。ことし六十八年にして。「神懸」てふ言を考得たり。是古へを後より考れば。二百とせのいそしもてやうやくに考ぬ。しかるを『紀』撰れし時代には。やすらかに字をあてゝ。心のまゝに「神懸」の言の意を得られぬ。されば古言は言もて解べきことわり明らかなるをおもへ。

○諸成猶按るに。中比より我国の言を解に。『古事記』已下の古言はさら也。其余の訓をいふとて。『文選』に何かしの字をかく訓。『遊仙屈』に彼を是と訓と云こと有を。わが友がらもしる也と思ひしはいまたしかりけり。そは字に訓をあつるより所にはすべし。言を解にそをもて我古へのさまをしるとはいふべからず。言を解得て後に。字はいかさまにも義にあて書べき事にこそ。我国には字てふものはなき国にて。千万の事をいひたらはさぬ事なき国成ことをつら〳〵思ふべき也。しか思ては字の義もて言を解は。必しも古へにかなはぬ事しるべし。しかしてたまちはふ。皇神の御世のたふとさをしるべし。

ひとつと言所の頭書【真澄による注記】

【真淵『語意』「ひとつ」への諸成注記事項　（以下同様）】

○天竺には。たとへは加行のみにも加我(カ)伎(キ)也加(ヤカ)牟(ムガ)我(ムガ)牟(ムキ)伎(キ)也(ヤ)六つ有て。三十音也。如此の音を合すれはいと多し。此国には清言五十言の外に。濁言二十。半濁五つ。すへて七十言のみにて。いと言少し。其少きをもて千万の言にたらはぬ事なきは妙ならずや。

【甲本段下ゲ事項】諸成按るに。はやくより清濁七十言といへど。「波比布倍保」の言を半濁に。「和為宇恵於」の如く唱ふるは別言とおぼゆ。何ぞといはゞ。「婆備夫便凡」の言を「万美武米母」の清言もていふは。『紀』其外にも同言とす。「邪自受是俗」「太治豆伝抒」を「奈尓奴禰乃」の清言もて云も。又同。「婆備夫便凡」を「和為宇恵於」の如くとなへて和ならず。「波比布倍保」と「婆備夫便凡」を別言とするからは。半濁も又別言とすべし。「加伎久計古」の半濁を「良利留礼呂」とするは。言七十五言の中にて云な

れば。始に「万美武米母」を「婆備夫便凡」の半濁とする如く明らか也。さらは七十五言也。
○唐より文字の渡り来しは。人の世となりて也。字なくしてたりぬ皇神の御世の。ひさゝに伝りしことわりをこゝに云也。藤原の宮の比よりして。千万の事。唐の手風に成て。我国風を忘れはてたる世には。字もてする外はあらで。皇神の御世のやすらか時のかくろひ行しを。なげきていふ也。
○小治田宮は後に舒明天皇と申す。軽嶋の宮は後に愿神天皇と申す也。
○後より考へあつれば。其通言・転言・延約こと。さま〳〵にて。中にはいとむつかしく通はしたるもあれと。其本はおのつからしるいはれしもの也。是ぞ則此国の天地の言のかなふなれば。人の国のことをかりしにあらぬ事を知べし。其通言等の数〳〵は。下につふさにするを見よ。

二つのかしら

○我国に音と云は。字音の事にあらず。言に平聲・去聲の唱有を云。
○国所といひ其地の音と云は。都人は都の音。西東の田舎の地はそこのならはしの音のまゝに云をいへる也。皆音もて云。あたし国の事にはあらす。西の詞。東のことば。又は常陸の言。みちのくにの詞など云我国の音のこと也。
○大人の書しには「宇比地尓上神」云云。次に字は異にせざり。又「阿奈迩夜志愛上袁登古」をてふ「袁」は去聲なるを云云の文あれど。諸成考るによしあればすてつ。よしは『古事記考』に云べし。其よしは千蔭も黒生もうべなりといへば也。
○皇神の御世のまゝに。言も辞もいひつたへて。後に唐の字渡りて。一度仮字定まりしより。かく久さに伝りてかはらず。そのかはらぬに付て。言の意も均しく明らげし。此言の意。上ッ代にかはらぬ事を。解得ざる人。唐の字の意による故にみだりに成ぬ。其言いかに転したるも。猶仮字の本によりて。あきらめらるゝ事の。妙なる味をふかく心得る人かき也。
○『古事記』一本には「意計弘計」と有。二本には「意保計」と有。こゝは其一本「意計」とのみ有に依て云也。既祖父(オチ)・祖母(オバ)・大父・大母・小父・小母の意にて。同言の如くなれど。仮字は大にわかれたる例をあかす也。さらば『古事記』もしかる例をもてかけ

れば。「意計」とのみあるもたがへるにあらぬ也。

○吉野の明義法師は。南朝につかへまつりし人にて。定家卿の仮字の定めあるをあけて。字といふ物こそたゞしかれと。『仙源抄』と云ふみの跋にいへり。そは水戸の中納言の君のゑらばれし。『扶桑拾葉集』の十八の巻にあけ給へり。我国の言を解には。仮字をこそ証とはすれ。始よりくれ〳〵も云如く。仮字さだまらで言を解得てんや。此法師は古へをしらぬもあまりある人にこそ。諸成『拾葉集』にて見出たれば。こゝにそへていふ。

竪横云阿行の頭書

○大人の書し『語意』に。「阿伊宇恵袁」は。同行と和行にはいさゝか通はし云言あれど。加行より下の八行に通へる事なしとかゝれぬ。さるをおのれこたびあらためしは。大人のをしへのねもころなる故。かく考る言どもの外にすてに云如く。『荒良言』てふふみ書て。ふかく言のよしをおもひ明らむる事あれば也。たゞにをしへのみまもりてあらば。山菅のねもころにしめし。揖のとのつはらかにふみともに書残せしいたづきなみする也。此おくにも。此古言のうしなはれしをたとへて。あらしま風にあへる舟の。行へしらすなんなりにき云云。をまたくせん事は。すみのえの大神のさち〳〵と。ねぎとめおかれし。むらきもの心まけを。むなしからせしとなり。

地の巻

袁古曽登の行頭

○他(ホカ)は阿行をのそきていへるに。是のみ「遠」を挙るは此言は多く通るあれば也。

○雅言・平言・俗言のわかちは末の條に此言を云頭に委し。

○唐文に「行(オヲフ)〃〃之時」なとやうに有之は。かしこの助辞の例のみ也。かく横の「之」をこゝの言にて訓べからず。よめば俗言となる也。

○「於」は物の下いはぬ言なれば。かく云事なきはもとより也。されど鄙俗に児などの言にかく云も有は。此於なる事を例に推していふのみ。

○「左耶々々」といふは。物の鳴る聲也。「左恵々々」は。さわぐ事也。此仮字よくせずばまどふべし。

○本言は言通延約の道によるをいふ

○言の本をもてすれば「須和為」なるを。用言を通せて常は「須和利」といへり。こゝには其言のまゝに「すわゐ」と挙つ。「すわりなん」と右に同し。此外も常言と違ふは。皆本意にて云也。

○『和名抄』に「止保太阿不三」とあるは「阿」の仮字余れり。「止三」の訓を借しも。古の例にはたがへり。其比やゝかゝる語の書こしを見て。其後の世に誤多きをもしれ。

○古へはふくむるを。「布保」とも「保々」とも「布々」ともいへり。口のほゝむも含よし也。

○言便は。ことのすべとも言のたよりとも訓へし。また冠辞をも。かうむり辞ともかむらせこどとも訓へし。かゝる言に真渕は字をかりしを。唐まなびする人。言便と云も冠辞と云も。かゝる熟字なしとわらふ人は。此国の言をしらて唐学になづめる也。それ上つ代。山川地の名。物の名。熟字にかゝはらず。おのがさら〳〵字を宛たり。吾国もとより字はなし。唐字の渡りて。言のまゝに字を宛たる也。言もて字はいかにも心にまかせて借れる。よてより所は。『古事記』『万葉集』を引て見るへし。されはこそ。字の熟ふ熟は吾国の事ならず。言こそいかにもくはしくせんものとしれ。我国の物〳〵の名。熟字にかなひたりとて美ともなさねば。熟字にかなはさるが。恥ともなし。『紀』は紀の人てふ儒者の撰し也。『万葉集』中の人万呂集は。唐を学しなれは云にたらず。よて古言しらぬ人を道引たづきに。言便とも冠辞とも。字をかりそめに借たるなるをしれ。

転回通言の頭

○「万志」を「万自」と濁は。言しらぬ俗也。別言なるをもしらぬなれば。いふにたらねと。清濁のおもむきをしらしめんとて左に云。「見万自」は「見るましき」にて。「見す」の意。「ゆかまじ」は。「行ましき」にて「不行」の意也。こゝに云「万志」の「志」

を。濁事なかれ。さてこゝも本の『語意』に有は。延言か例たがへれば。あらためつ。

○奈良の朝に。「相模・武蔵」の字を用ひられしより。実をうしなひて。後人附会の説を云におよべり。さて西の国は。前後をもて国をわかち。東の国は。上下をもて国をわかてり。よくかなふを思ふ。「筑前・筑後・肥前・肥後・上野国・下野国」と云に。いとよくかなへり。

諸成此言を或人にいひて。真渕の言にくはしかりしをしめしけるに。「むさがみ・むさしも」といひては。東の国の名わかたれしにたがへりといへり。おのれこたふ。都の名に「城上・城下」有。「上県・下県」てふもあれは。地のさまに依て上にも下にも云べしといひしに。やうやく心得ぬ。言を解にもかくまで思ふは。俗に入ほがと云わさ也。そがうへを問に。答のあらぬあらねど。しか心得て後。自らしらるゝ也。

○天竺に音意多し。此国には少きよし。上にいへるがことし。

○土師を「波尓志」と唱ふるも。「波自志」と唱ふる。「波尓奈志」を約転し云也。金師は「加奈毛乃奈志」を畧きて。「加奈志」と云を。又転して「加太志」といひ。其「太志」を約て。「加治」と云類也。

○雅言とは古意は本よりにて。今も伝へていへる正しき言をいふ。平言とは常言にて。しかしなから誤とはなくて。雅たらぬをいふ。俗言とは訛り転し。又他国の言と更へいふをいへり。

【真澄の識語】

享和三癸亥きさらきはてのよ写しをはる

〔せきね文庫（印）〕

【千蔭門歌集（仮題）】

後撰集のこゝろみしかきやうにきこゆる人なれはといふことかきを題にて　千蔭

あくよなくおもひしみてし花のあたに散行ははなこそ心みしかゝれ袖にかすめしうつり香をたに忘れかたみにおもう給へらるゝをかくてしもしられぬはかひなくなむ

心つからうつろふ花に名はたゝてさそはぬ風もいとはれにけり

よをうくひすの

返し　縫子

のとかにもたのまれぬかを花ことに吹とふきぬる風のこゝろは

人のもとより暁にかへりて　自寛

よへはあからさま成たいめにていつも心あわたゝしくなん何くれといふへきこともとうてやらすいつしかことかはりてうひ〳〵しき御もてなしもみしかき春の夜にいとゝかすめなし給ふ御ことのははいかなるかたになひく柳にやとうらみもはて立帰りぬるそ名残おほかるわさになんされと

別ゆく有明の月はかすめともおほろけならぬ契をそおもふ

とねんしかへしても猶心はおちゐ侍らすなん

返し　まさ子

きぬ〳〵のつきぬかたみと見る朝もかすむややたつこゝろなるらむ

女のもとにきぬをぬきおきてとりにつかはすとてといふを題にて　春海

啼音におとろかされしはとりあへぬきぬ〳〵になんさるはかたのまよひよいかに見給ふらんとねたきものから

あふまてのよすとおもふなれころもとりかへしてや夢もむすはむ

六〇

今はうたゝねをこそ

返し　ちえ子

とりあへすたちわかれにしきぬ〳〵をうちかへしてはうらみてそなく

ものいひける女のかゝみをかりてかへすとて　雨岡

朝夕むかひ給へりし御面影をさらに見給はほしくてものし侍りしにいふかひなくことかきにうつりゆきし御心すさみはいと〳〵つらうなんかきくもるみたり心ちにかへつをれ侍りしかはみなも中〳〵おそましくて

照しても見せましものをわかこゝろまさしにうつる鏡なりせは

ちかひしことはよも

返し　本子

年ふとも人のこゝろのうつらすはますみのかゝみかけてたのまん

女のもとより心さしのほとをなんえしらぬといへりけれはといふこと書の心を　躬絃

はかなき花もみちのよすかもしる人にこそはとふたしへなくおもふ給へらるゝものをいかておほそうにはとりなし給ふらむ

わたつみのちひろのそこのふかみるの浅きかたにはえこそしられね

返し　くみ子

わたつみのそこに有てふふかみるはたかためとてかか深く成らむ

女のさうしによな〳〵立よりつゝものなといひてのち

かすめる月のよな〳〵にほのめかし給ふことの葉の露わすれかたうきえかへりておもふもはかなしや　なる枝

鳥か音におとろかされてきぬ〳〵のかたみに袖をぬらす夜もかな
いつうちとけて
返し　　みち子
とりかねはおとろかせをもあふさかの関越かたき身をいかにせむ

おなし所にて見かはしなからえあはさりけるをみなにといふことかきの心を　　浜をみ
みしかきあしのとおもひ給ふものから猶春のひとよもあかしかたき比なるにあやにくなる磯のみるめは霞のよそならていたつらにあひねの浜の名のみきゝわたり侍らんはあやなきわさになむ
あひ見つゝいひよることはかたし貝くたけてのみも物をこそおもへ
袖のみなとは空にもしり給はんかし
返し　　さた子
影をのみ見つのみなとのかたし貝あふことなみにくちやはてまし

人をいひわつらひてつかはしけるといふことかきのこゝろを　　直とき
ふるは涙かとおもう給へらるゝ春のなかめはいとゝかきくらしつゝ敷たへの枕に身もしつむはかりになんけに行水にかすかくよりもといとはかなきことのみおもひつゝけられし
夢にたにあふをしらねはなか〳〵にありてかひなきいのち成けり
さよの中山もいとこそたのみかたけれ

あたなる人をあひしりて心ざしはありと見えなからなほうたかはしくおほえけれはといふことかきの心を　　雄風

六二

なかれてよらすなとたのめしことも末のふちせこそさためかたけれかゝるえにしの浅瀬しら浪たと〳〵しうのみおほえ侍りぬさるはあた浪のさわく川水すみもせすにこりもはてす年そへにける

返し　直節

あた浪もあさきせにこそたちもせめそこのこゝろはしる人そしる

女のもとよりわすれ草にふみをつけておこせて侍りけれは　つねよし

そこはかとなきゆふへの空とも心からにや後わひ侍りぬるにかきまさくるつま琴のことさらにとはせ給ふるになんめつらかにうれしと見給ふるものからたまはりし花こそあやしけれ何をたねといと〳〵うしろめたう

植て見るこゝろそうときわすれ草わすられぬへきおもひならぬを見しりたまはぬやいかに

返し　妙性

つみうへきことにしあらねは草の名の露もわすれぬ人に見せはや

年へていひわたりける人にといふこと書の心を　ふみ子

あまのかるものめつらしけなくかきこえぬことのはも沖のつりふねうけも引れぬとし月を猶こりすまに恋わたれとも哀とたに思はれぬ物からいとふをしたふことわりにいとゝうとみ給ふらんひとのつれなきにつけてもおもひとちめんと思ふにあやにくなる袖のなみたになんさらはまたなか〳〵にくちもはてねと思ふいのちさへつねなきも我からうらめしう

いかてかくおもひたえなてたまの緒のなかくも人を恋わたるらん

返し　りか子

むかしとおもはむと思ふもわりなう

たまの緒の長きちきりとしらすしてこゝろもしかく恨つるかな

をとこの心やう〳〵かれかたに見えけれはといふことかきを題にて　もと子

ことにすむ虫のとおもひかへしても猶おほつかなさはおもうたまへしのひかたくなむ

なかめせし花ならなくにあた人のうつろふ色の見ゆるこの比

あかす散ぬるとのみはおもひとちめかたう聞えさせんこともおほかれと今更にいかゝは

返し　雨岡

色香こそならひにもれぬ山さくらかへりし花の根さへかれめや

人の心かはりけれはといふことかきの心を　みち子

はしめよりなほさりことゝもおもひわかさりし心をさなきは今更にとりかへすやうも侍らねと猶さやはちきりしとか忘れてはうちなけかる事もあやしう

ひと心浅かのうらのあたなみもかはかりそとはおもひかけきや

くた〳〵しからむもいかにそやとて

返し　長枝

あた浪のたつともしらす過ぬるをたれかあさかのぬまとつけゝむ

あひしりて侍りける人のもとにかへりこと見むとてつかはしけるといふ言かきの心を　ちえ子

かすめる心のおほつかなさにつけてもいかて御心のくまことに立かくれつゝも見たまはほしうこそ

かりにたに君かみつくきかきとめてはやかへりこと待わたるこそ

六三

六四

返し　　春海

よしさらはくみてたにしれ水くきにかきもつくさぬひとのこゝろを

たのめたりける人にといへることかきの心を　　くみ子

うきにはなれし中なれとさすかにかきり有やとて猶こりすまにたのまるゝにつけてもはた
いかにせむ月はかならす山のはを出ても雲の余所に過なは
まつはまことになむ

返し　　みつる

心をし山のあなたにへたてすは月やはくものよそにすくへき

かれかたになりける人に末もみちしたる枝につきてつかはしける　　妙性尼

雲のうはかき書たえて問せたまはねと心のまつは色かへすなむさるにても今はをりしりかほなるひと枝もたゝならすなかめられて
たのめつる人の心もよのあきの色にならひてもみちそめけむ
かつらきの神ならねと一ことの御いらへをたに聞へ給ひねかし

返し　　恒好

かはらしとおもふ心の色さへも人の秋にはあへすそ有ける

忍ひたりける人につかはしける　　りか子

あまのくものよそに過行は中空をのみなかめられ侍りぬいつしか関もりのうちぬる宵もかなとすかのねの長き月日にそへて待わふる
もはかなきすさみになむ

硯には人めの関のかたけれは夢になりともあふよしもかな

返し　　ちえ子

夢にたに見ゆとしきかはから衣かへしてもねむあはぬつらさに

をとこのこむとてこさりけれはといふ心を　　幸子

雲のおこなひしるしなくてさゝのはのそよとしもおとつれさせたまはぬはおほぬさにやとおもう給へらるゝにもいとゝなかめ侍りぬ

月さへかたふきはてぬれは余所の哀もおもひそはるこゝちし侍るにこそ

たのめしもあらぬつらさに樵の戸をさゝけ明ぬるあかつきそうき

かへし　　てる子

問よらはお母なからまし我なくて余所にあけぬる樵の戸ほそを

いひかはしける人の今はわすれぬといふことかきのこゝろを　　てる子

松山の色はなほつれなくて侍るものを住のえのきしにあふてふ草はいつこよりつみたまひけるにかあらむさるにても

忘らるゝ身はわれからのうきふしとおもふにたにもぬるゝ袖かな

人のいのちのとなむ

かへし　　幸子

すみのえのまつのねたさにおのつから恋わすれ草つみてけるかな

つらく成ける人につかはしける　　まさ子

雨雲のたえまと見しはいとなるゝ身のはしめともおもひわき侍らてあし分をふねさはりありてやなと心をやりてしはしはなくさめし

六五

六六

もあさましきまて遠さかり行月日につけてこそ是やかきりなりけめとうくもつらくも思ふ物からなほ空をのみなかめらるははかなきわさになむ

わするゝをしひてわすれぬ心こそ人のつらさにそへてつらけれ

返し　自寛

わするともおもはぬ中のをこたりをおとろかされて身をなけくかな

はつかに人を見てつかはしける　さた子

さゝれ石の中の思ひをはかなきよすかにうち出ぬるもいと〳〵なめけにやおもほしたまふらんとつゝましき物からおほ空の月をふちのたもとにやとす例もなきにしあらねはすくせのなすわさにやと見ゆるし給ひてよ

限なき雲ゐの余所にほの見しもおほろけならぬ契りならすや

返し　浜をみ

春の夜の夢のうきはしそれならてふみ見てもなほまとふころかな

をとこのもとより今はこと人なむ有といへりけれはてふことかきの心を　縫子

色見えてなとのたまふこそあやしけれひとよの車は命婦のおもとかかたゝかへにまかてしを引たかへさせ給ふるもあたなる御心ならひになん

咲花にうつるてふ名はつゝむともひとにやきせし露のぬれ衣

返し　千蔭

我きせし露のぬれ衣ほして見よありしなからのおもひなりせは

〔せきね文庫（印）〕